

ヨーロッパを 熱狂の渦に 巻き込んだ カーリヤ …次は日本だ！

文：ミッコ・メリライネン

すべてはユーロビジョンから…
いや、その10年も前からフィンランドの
近郊都市ヴァンターで始まっていた。
「Cha Cha Cha」でヨーロッパじゅうの
オーディエンスを大いに盛り上げ
世界のトップアーティストと
インターナショナル・トラックをコラボする
カーリヤ (Käärijä)。
彼はいま、その照準を日本に定めている。

さらに今度は何かが全く違う。フィンランド語の、メタルの影響を受けたパーティ EDM ポップを、日本のオーディエンスに向けて歌うのだ。こんなワイルドな企画いまままでにあったらどうか？

そんなチャレンジをするほどクレイジーのはイエレ・“カーリヤ”・ポウホネンにおいて他にいない。6月12日、カーリヤは自身のアジア初となるギグのために大阪へと向かう。パフォーマンスはEXPO 2025 大阪・関西万博、フィンランド・ナショナルデーでの開催だ。正確には「パーティー・ライク・ア・フィン（フィンランド人のようにパーティーしよう）～ロック&ファッション～」イブニング・パーティでの公演で、カーリヤとボーカルグループのトゥーレタル (Tuuletar) の共演となる。

その人気がいかがはず世界的規模にまで成長したカーリヤの次なるステップとして、日本公演は完璧に理にかなっている。全欧を制覇したいま、今度是他の国々に目を向ける時が来たのだ。

「カーリヤのスーパーヒーロー的なヴァイブ、ボレロジャケット、ボウルカット。これはみな日本のオーディエンスにアピールするんじゃないかなとは思ってたんだ。日本の人はヘビメタやフィンランドのいろんなものに興味をもってるからね。」スイス・バーゼルとつないだビデオチャットでポウホネンはこうコメントした。



Photo: Warner Music Finland

「日本はヨーロッパの次のターゲットとしてずっと注目してたんだ。大きなマーケットだし、うまく行ったらその後も永遠にツアーを繰り返せるし。もちろんそのために大きな努力が必要だけれどね。」

ストリーミング数からは、アジアでの出足に有望な兆候が見て取れる。

「実は昨日ここバーゼルで、東京から来たファン、しかも私のフィンランドでのライブにも来てくれていたという人に偶然出会ったんだ。」そう話すカーリヤは本当に嬉しそうだ。

「とにかくやっぱり出かけて行ってライブを見てもらわないとね。カーリヤとしていつも信じているのは、自分たちがやってることは実際に見てもらえば理解してもらえる！ってこと。いくつか日本語トークのフレーズもおぼえてステージで話したら、みんなすごく気に入ってくれると思うね。」

帰ってきた「みんなのチャンピオン」

ポウホネンがバーゼルにいるのはもちろんユーロビジョン・ソング・コンテストのため。このインタビューの

前夜には、2024年大会のフィンランド代表エーリカ・ヴィークマンと共演。さらに決勝ステージでは昨年度ユーロビジョンで大人気だったクロアチアのアーティスト、ベイビー・ラザーニャとコラボし、新作ジョイントトラック「#Eurodab」を世界最大規模となるTV視聴者に向けてライブで披露することになっている。

カーリヤがユーロビジョンを出発点に世界的なアーティストとして走り始めたことを考えれば、これはもう完璧なステージだ。2023年大会では「Cha Cha Cha」は一般視聴者票では地滑りの支持を得てポイント首位を獲得したものの、(審査員票合算後の)総合得票ポイントではスウェーデン代表のロリーンに僅差で及ばず2位となっていた。

それ以来、事態は急展開を見せる。

「もし『Cha Cha Cha』がユーロビジョンとは無関係に世に出ていたらこんな展開にはならなかったと思うんだ。外国の誰かがいつか発見してくれたとして、それが何かを引き起こしたかもしれないけど、ここまでの熱狂的な現象になったのはユーロビジョンのおかげだね。」とポウホネンと言う。

コラボのチカラ

すこし話を巻き戻そう。イエレ・ポウホネンは、フィンランド南部の近郊都市ヴァンターで中学生だった頃にラップミュージックと出会った。2014年ごろには自ら作曲も始めたが、それはEDMとラムシュタイン・スタイルの強い影響を融合したものだった。ワーナーミュージック傘下のフィンランド・ヒップホップの有力レーベル Monsp Records の目にとまるまで、カーリヤの初期作品は厳格なまでのDIYによって作られていた。

「たぶん6年くらい前のことだと思うけど、プロデューサーと私でどうやってドイツ市場に売り込もうか、当時すでに考えあぐねていたんだ。ベルリンのストリートにでっかいラジカセ持って行ってカーリヤのトラックを鳴らそうかと思ったり…まだ当時フィンランドですらブレイクしてなかったけどね!」とポウホネンは笑う。

次の大きな課題：それはユーロビジョンの魔法が解けたあと、どうやってこの勢いをキープしていくのか?ということだ。

「私の音楽はユーロビジョンを追っかけてない人たちも引き続き見つけてくれているんだ。単にあの大会でのバズり効果だけだったら、今でもライブ完売できてるなんてことにはならないだろうしね。火をつけたのはユーロビジョン、でも今はそれを超えて燃え広がってる。」

カーリヤとチームは、すでにこの先2年の明確なロードマップを描いている。

「ヨーロッパでツアーや大規模なショーを計画中で、そして日本はスペシャル・フォーカスの対象。もちろんさらに先のことも考えているけれど、それはその次。」

戦略の鍵になるのはさまざまな国のアーティストとのコラボだ。カーリヤはこれまですでに、クロアチアのベイビー・ラザーニャ、エストニアのトミー・キャッシュ、オランダのヨースト・クライン、スウェーデンのホーヤといった波長の合うアーティスト仲間と組んできた。「まだまだもっと続くよ」とポウホネンはほのめかす。

楽しいからやってる

Käärijä カーリヤという名前は簡単に翻訳できない言葉だ。文字通りの意味だと「巻く人/もの」とか「包む人/もの」といった感じだが、フィンランド語の kääriä rahaa という言い回しには「短時間で金儲け」といった感じの意味合いがある。

皮肉な名前とはいえ、カーリヤという名前がユーロやセントといったお金のことを意味するわけでは全くない。楽しむことがすべてという意味、これがポウホネンの主張だ。

「やってることが大好きだし、これまで作ったトラックも全部好き。いつか『Cha Cha Cha』はもう歌いたくない気分になる日が来るなら、それがいろいろ考え直すタイミングだね。」

「単純にいいものを作って、楽しみたい。それだけ。自分自身に、そしてフィンランドの人々に、これが外国で通用するということを見せたいんだ。」

ポウホネンはフィンランド語という言語が障壁になるとは考えていない。

「これはもう実証済みかなと思うんだけど、フィンランド語のいい曲があれば、外国の人たちとだって何かしらつながれるし、つまり不可能なんてないってことなんだ。」

不可能などない。だが、最高にクレイジーな夢は何ですか?と問いかけると、カーリヤからはフィンランドのルーツに忠実な、地に足がついた現実的な答えが返ってきた。

「いつかドイツかイギリスでアリーナ・ギグができれば最高だね。まずはそれ、やってみよう。」